

# 関町教会の皆さんへの手紙

2020年3月8日 No.671

バルトロメオ稲川保明神父

十 キリストにおける兄弟姉妹の皆さんへ

「私たちの負い目をおゆるし下さい」

今日は四旬節に入って 2 回目の日曜日、毎年四旬節第二主日にはゆるしの秘跡が行われています。ゆるしの秘跡には、七つの要素があることは皆さんはもうよくご存じだと思いますが、おさらいとして①心の糾明（自分の心、ことば、おこないを神様とともに見つめて）②悔い改め（回心とは心と生き方を神様の方に向けて歩みだすこと）③告白（すでにすべてを知っておられる神様に自分のことばで語りかけること）④司祭の勧めのことば（医師として、裁判官として、神の慈しみの奉仕者として語る司祭のことば）⑤悔い改めの祈り（放蕩息子のように自分を父なる神に委ねて）⑥ゆるしのことば（神が教会の奉仕の務めを通して与えるゆるしと平和を与えてくださるように）⑦生活の改善（まずは償いのお祈りを果たし、このお恵みに感謝し、神様の期待に応える生き方を目指す）という七つの要素のうち、司祭がかかわるのは二つだけです。つまりはこのゆるしの秘跡は告解する皆さんご自身の努力がととても大切なことなのです。

司祭が提示する償いとして、多くの場合、主の祈りを唱えることが勧められていますが、これにも大切な理由があります。現在の主の祈りでは、「わたしたちの罪をおゆるし下さい。わたしたちも人をゆるします」と唱えていますが、ラテン語では、「罪：peccatum」ではなく「負い目：debitum」ということばが使われていることが注目し値すると思います。わたしたちは自分の罪をゆるしていただいても、ほかの人の罪をゆるすという気持ちにはなりません。確かに罪をゆるすことができるのは、神様だけですから、人間である自分が自分の罪や他の人の罪をゆるすということは、少しおかしなことにも思えます。しかし、「負い目」であるならば、どうでしょうか？ 負い目とは負債や義務をあらわすことばでもあります。「こうしなければいけないのに、すまない、申し訳ない、と思いつつも知らん顔をしてしまいがちなこと」というニュアンスです。つまりは怠りという罪につながっていることなのです。わたしたちは四旬節を過ごす中で、普段怠りがちなことの中の一つでよいから、チャレンジしてみますという気持ちになることが大切なのです。

十字架の道行きというお祈りが特に四旬節に行われることも注目し値すると思います。このイエス様を十字架にかけたのは誰でしょうか？ あの時代のユダヤ人？ 死刑を宣告し、実行したあの時代の総督ピラトやローマ人兵士たち？ と誰かのせいにすることもできますが、実はわたしたち一人一人が今もなお、イエス様を十字架に追いやっているのでは？ と考えることもできるのです。ところがそのイエス様は両手を大きく広げて、わたしたちが飛び込んでゆくのを待っておられるのです。「十字架につけられたキリストの広げた腕を見つめなさい」（フランシスコ教皇様の四旬節メッセージより）